

認知的観点から見たヲ格とニ格の意味・用法の違い

森山 新(世宗大学校)

morishin@sejong.ac.kr

1. はじめに

日本語の格助詞ヲとニは共に動作など事態の対象を示し、広い意味での目的語を作るという共通点を持っている。一般にヲ格は対格、ニ格は与格と呼ばれることが多い。対格、与格は以下のように定義される。

対格(accusative)：事物が、運動の対象（最も直接にその対象となっているもの）であることを、その事物を表す名詞の語形変化で表わす場合に用いる。

（『日本文法大辞典』p.414）

与格(dative)：ある事物が、ある運動のむかう方向に存在する事物（特にある物を与える相手）であることを名詞の語形変化によって表わすような場合に用いる。（『日本文法大辞典』p.892）

この説明を読む限りでは、両者の違いはそれなりにはっきりしているようにも思える。しかし例えば以下の(1)や(2)において、「バイク」は運動の対象であるのか、運動の向かう方向に存在する事物であるのか、はっきりしているとは言い難い。

- (1) 息子がバイクに乗っている。
- (2) 息子がバイクを乗りまわしている。

また、韓国語では「乗る」に相当する動詞“타다”に共起する格助詞は、ヲ格(을/를)、ニ格(에)の両方が可能である。例えば(1)に相当する韓国語は(3)と(4)が考えられる（もちろん両者の意味や用いる文脈は微妙に異なっている）。

(3) 우리 아들이 오토바이를 탄다. (ヲ格が共起)

(4) 우리 아들이 오토바이에 탄다. (ニ格が共起)

さらに(5)~(12)の8つの文を見ると、ヲ格もニ格も、人、モノ、場所、時のいずれもを格とすることが可能なことがわかる。

ヲ格

(5) 彼はボールを投げた。(モノ)

(6) 彼は妹をなぐった。(人)

(7) 女の人が道を歩いている。(場所)

(8) 思春期を経て大人になる。(時)

ニ格

(9) 彼は弟におかしをあげた。(人)

(10) 子供が自転車に乗る。(モノ)

(11) 先週、私は大阪に小包を送った。(場所)

(12) 私は8時に朝ご飯を食べる。(時)

このように見てくると、ヲ格とニ格の間には何らかの意味があるというよりは、各言語ごとに、また各動詞とそれに共起する名詞との間に取り交わされた単なる形式的取り決めに過ぎないように見えてくる。

しかし以下のように動詞に共起する格が異なる対の文を比べてみると、両者の間には微妙ではあるかもしれないが、何らかの意味的な違いが生じており、それが使用可能な文脈の選択に制限を加えているように思われる。

(13) 山を登る。 山に登る。

(14) 進路を悩む。 進路に悩む。

(15) 娘の結婚を反対する。 娘の結婚に反対する。

(16) 苦痛を耐える。 苦痛に耐える。

- (17) 子供を行かせる。 子供に行かせる。

本稿では最近の認知言語学的な観点を参考にしながら、これら日本語のヲ格とニ格には意味・用法上の違いはあるのか、あるとすればどのようなものであるのかについて明らかにしてみたい。

2. 先行研究

まず英語などを中心に研究が進められている認知言語学の観点を紹介する。英語などにおいては、対格、与格はそれぞれ以下のように直接目的語、間接目的語を作る。

- (18) He gave a present to her.

- (19) He gave her a present.

対格は常に主格と共に前置詞なしの形（無標形）で用いられるが、与格は二重目的構文を除いては、toなどの前置詞を伴う（有標形：斜格）。認知言語学の立場では、こうした形式の違いは、何らかの意味の違いを反映していると考えられている(Langacker: 1991a, 1991b)。すなわち無標形で、しかも動詞に最も近い位置に置かれる主格と対格は、動詞が示す事態において特別で直接的な役割を持っていると考える。また前置詞と共に副詞的に用いられる有標形の与格はそれだけ動詞が示す事態との関係性が遠く、間接的だと考える。二重目的構文では与格は前置詞が外され無標となり、しかも動詞の直後（直接目的語より前）に置かれるが、これは直接目的語の受領者、所有者として与格が焦点化され、それだけ動詞の示す事態に対し特別で直接的な関わりを持つようになったという意味上の変化が形式面に表れたと考える。

このように見ると、対格は与格に比べ、動詞の示す事態に対し、より重要で直接的な参与者であるということになる。

一般に、運動の直接対象が運動と特殊に密接に結びついているものであること、運動のあり方を強く規制するものであること、運動の結果を一番深くこらむるものであることなどの理由で、それを表わす言語形式（＝対格：筆者注）は、動詞と強く結びついて表れたりする（英語などの場合）。（『日本文法大辞典』、p.415）

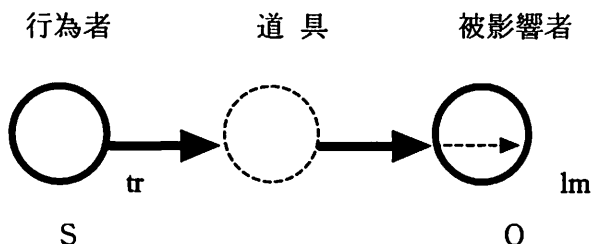
ところが日本語の場合は、語順が比較的自由であり、動詞の直後にヲ格が来ること、ニ格が来ることありうる。しかしながら一般的に言えば、ヲ格（対格）は動詞に近い位置に立つ傾向を示す。

日本語のように語順があまり問題にならない言語でも、（対格は：筆者注）術語になるだけ近い位置に立つ傾向を示したりする（同上）。

このように日本語の場合でも、ヲ格はニ格に比べ、動詞の示す事態により重要で、直接的な参与者であることが形式に反映されている。

Langackerの認知文法によれば、対格（直接目的語）は、事態連鎖のうち、スコープ化された部分の最後尾に位置し、最先端部に位置する主格（主語）と共に事態に直接関係した参与者であると考えられる（図1参照）。

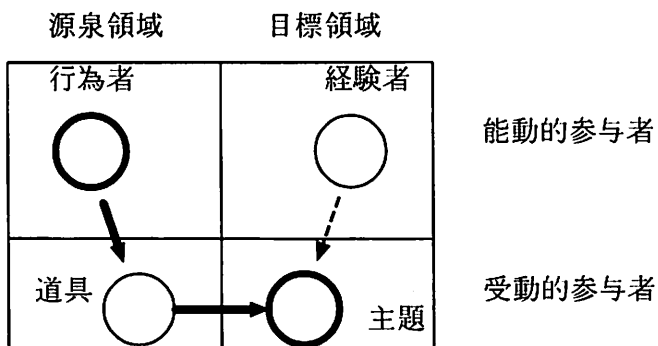
図1 他動詞節の事態連鎖（Langacker(1999: p.360) 図8.2）



これに対し与格（間接目的語）は、主格から始まり、対格を持って終結する事態連鎖の傍らに存在しながらも、それからは独立して存在すると共に、プロ

トタイプとしては経験者として新たな事態連鎖の始発点となりうるとしている。そのことが図2に示されている。

図2 二重目的構文の事態連鎖 (Langacker(1999: p.353) 図7.5)



主格（行為者）から対格（主題）までが一つの事態連鎖でつながっていること、主格は源泉領域の能動的参与者、対格は目標領域の受動的参与者であること、また与格（経験者）は主格から対格への動作連鎖からは独立しており、目標領域の能動的参与者であることなどが図式的に示されている。

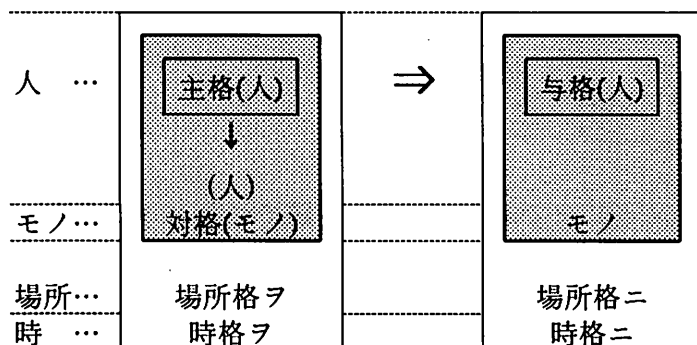
3. 日本語のヲ格、ニ格

しかし日本語のヲ格、ニ格はいわゆる対格、与格に比べその使用範囲が広く、上記の(7)や(8)、及び(11)や(12)に見られるように場所格や時格的な用法をも含んでいる。(7)のような場所格ヲは単に主格を源泉とする動力の流れの最下流に位置し、動力を吸収し、何らかの変化（被経験者）や移動（移動者）を被るものではなく、逆に受けた動力を舞台(setting)としてはね返し、主格進行の動力に変化せしめる。また(8)のような時格ヲは(7)のような場所格がメタファー変換されたものとして理解できる。時格ヲは、場所格の場合同様、主格からの動力を舞台(setting)としてはね返し、未来（時間的前方）へ向けての主格の進行の動力として変化せしめる。

一方(11)や(12)のような場所格や時格のニは、プロトタイプの与格が持ち合わせている目標領域の新たな能動的参与者としての役割は持っていない。しかし

場所格や時格のヲが事態連鎖の最下流に位置し、主格のもたらず事態の直接の影響下にあるのとは対照的に、場所格や時格のニはそこ（主格のもたらず事態の直接の影響下）からは独立した存在として主格に対峙している。言いかえればこうした目標領域における「独立性」が、目標領域の新たな「能動的参与者」といった意味・役割が拡張したものと考えることができる。このことを図に示したのが図3である。

図3 日本語のヲ格、ニ格と主格との関係



対格が主格の動力の下流にあり、その影響下に置かれていること、与格は主格が源泉領域の能動的参与者であるのに対し、もう一つの目標領域の能動的参与者であること、また場所格ヲ、時格ヲは対格の拡張であり、場所格ニ、時格ニは与格からの拡張であること、さらには主格や与格のプロトタイプが人であり、対格のプロトタイプはモノであることなどが示されている。また(人→モノ→場所→時のヲは主格に対し受動的立場に置かれているのに対し、人→モノ→場所→時のニは主格に対し非受動的、独立的立場にあること、それは主格の動作、運動などの向かう前方に対峙している。

このように見てくると、今まで似たようなものとして見えていた格助詞ヲとニの意味・役割の違いがかなり明らかになってきたかと思う。次に今までの分析をもとに、(13)~(17)で見たようなヲ格、ニ格のいずれもをとることができる動詞節の意味上の違いを明らかにしてみたい。

今までの言及で明らかであるが、主格を中心として見ると、ヲ格で表わされ

たモノ（さらに場所、時）はすでに主格が発する動力の影響下に置いて、具体的に動詞が示す働きかけを及ぼす対象として存在している。これに対しニ格で表わされた人（さらにはモノ、場所、時）は、主格が発する動力の影響下に置いておらず、これから動詞が示す働きかけを及ぼしていこうとする対象として独立して（または離れて）存在している。さらに主格はニ格に対しては自らが発する動力の影響下に入れることができず、逆に主格自体のほうがニ格のほうへ移動、接近し、その影響下へ入っていくことが求められる場合もあろう。そういったヲ格とニ格の違いが以下の対となる文の意味の違いとなっているのではないだろうか。

(13) 山を登る。

山に登る。

(13)では、前者は主格で表わされている人がすでに「山」を自らのものとして消化し、「山」を征服し、味わっているといったニュアンスが表れている（文学作品などでヲ格を用いた表現がよく見られるのはこうした理由によるのであろう）。これに対し、後者では「山」は主格に対峙し、主格自身のほうが移動し、接近していくことが要求される存在として独立的に対峙している感がある。このような微妙な意味の違いは、明らかにヲ格とニ格の意味の違いがもたらしたものである。

また(20)の文章では一般にニ格が共起するのが普通であるのに対し、(21)ではヲ格が共起するようになることも同じように説明できる。すなわち、「山」はその全体を主格の影響下に置くのが容易でなく、また「山」の場合には特に山の頂上に焦点が当たりやすく、その意味で主格とは離れて対峙しているのに対し、「山の斜面」は主格の動作の及ぶ範囲に置かれやすいためであると考えられる。

(22)では(20)に比べてニ格のみならず、ヲ格の共起が起きやすいが、これも「山」に比べ「丘」はその規模も小さく、主格の動作の対象としてその影響下に置きやすいためであると考えられる。

さらに(23)や(24)ではヲ格が適しているが、これらも(21)と同様、「坂」や

「階段」といったものが主格の動作の及ぶ範囲（影響下）に置かれやすいためであると考えられる。

- (20) 山に登る。
- (21) 山の斜面に登る。
- (22) 丘に/に登る。
- (23) 坂に登る。
- (24) 階段に登る。

(14)~(16)も同様に考えることができる。(14)の「進路」や(15)の「娘の結婚」を主格の管理下に置かれた問題であると考えられるのか、それとも主格の管理の外に置かれた問題であると考えられるかが格の選択に影響を及ぼしている。(16)の場合も「苦痛」を主格の下に置かれたものと考えられるのか、それとも主格と敵対するものとして「苦痛」を捉えるのかが、格の選択を決定している。

- (14) 進路を悩む。 進路に悩む。
- (15) 娘の結婚を反対する。 娘の結婚に反対する。
- (16) 苦痛を耐える。 苦痛に耐える。

冒頭で例に挙げた「バイクに乗る」と「バイクを乗りまわす」の例についても、前者ではバイクが主格が乗る対象として独立したものとして記述されているために二格が共起するのに対し、後者ではバイクはすでに主格である「息子」の征服下に置かれているため、ヲ格が共起するのだと説明できる。

- (1) 息子がバイクに乗っている。
- (2) 息子がバイクを乗りまわしている。

(17)のような使役文では、一般にヲ格が用いられると強要の意味となり、ニ格が用いられると許容の意味が生じてくる。これも格の選択により「子供」を主

格の力の下に置くのか、主格の力とは独立した立場に置くのかが変わってきたものである。「子供を行かせる」はヲ格で表わされた「子供」を自らが発する力の下に置いており、強制となる。これに対し「子供に行かせる」では、あくまでニ格の「子供」は主格からは独立的であり、許容となる。

(17) 子供を行かせる。 子供に行かせる。

さらに舞台(setting)として用いられている場所格や時格のヲ、ニを比べると、ヲ格はすでに主格の影響下に置かれ、既征服的であるのに対し、ニ格は主格から独立しており、未征服的である。場所格のヲが起点または現在通過している経路を示し、場所格のニは目的地を示すことや、時格のヲのが過去(事態が起きた時点より前)を示し、時格のニは現在～未来(事態が起きた時点またはその後)を示すといった用法の違いはこのようなニ格とヲ格の意味の違いから説明できるのである。(7)では「道」が経路を示し、(8)では「思春期」が過去の時間的な経路を示している。また(11)の「大阪」は目的地、(12)の「8時」は事態が成立する「その時点」を示している。

ヲ格

(7) 女の人が道を歩いている。(場所)

(8) 思春期を経て大人になる。(時)

ニ格

(11)先週、私は大阪に小包を送った。(場所)

(12)私は8時に朝ご飯を食べる。(時)

4. まとめ

以上、最近の認知言語学的な観点を参考にしつつ、日本語の格助詞ヲとニの意味・用法の違いについて分析してきた。ヲ格とニ格とは大まかに言えば対格

と与格に相当するが、場所格や時格の用法も持っており、その範囲を越えている。しかしそれらは対格や与格のプロトタイプからの拡張として捉えることが可能であった。

ヲ格はプロトタイプとして、主格を始発点とする事態連鎖の影響下に置かれ、主格からの動力の流れを受け、変化や移動といった影響を被る（被影響者、移動者）。これに対し対格からの拡張としての場所格のヲでは、動力の流れははね返って主格の移動を推進する。その結果場所格のヲは起点または経路の意味を持つ。また時格のヲも同様で動力の流れははね返って主格の移動（時間的前進）を推進するが、それが時格のヲの過去（時間的経路）の意味を持たしめる。

一方ニ格はプロトタイプとして、主格を始発点とする事態連鎖の影響下には置かれておらず、目標領域において新たな事態連鎖の始発点となる。しかしその拡張としての場所格や時格ニでは、能動的参与者としての役割は単に主格からの独立性となり、場所格においては目的地、時格においては現在～未来（事態が起きた時点またはその後）の時制的意味を持つようになった。

本稿ではヲ格とニ格の意味・用法の違いをプロトタイプの場合を中心に概観してきたが、今後取り扱う具体例の範囲をさらに広げることにより、認知言語学的な観点の有用性を確認していくことが必要であろう。

参考文献

- Langacker, R. W. (1991a). *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford University Press. (韓国語 (金鐘道) 訳 (1999). 『認知文法の土台Ⅱ』ソウル：図書出版朴而情)
- Langacker, R. W. (1991b). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin; Newyork: Mouton de Gruyter.
- 松村明編(1971)『日本文法大辞典』、明示書院.